

浦志岸の上遺跡

—共同住宅建設に伴う調査—

糸島市文化財調査報告書

第 36 集

2025

糸 島 市

浦志岸の上遺跡

—共同住宅建設に伴う調査—

糸島市文化財調査報告書

第 36 集

2025

糸 島 市



浦志岸の上遺跡全景（北東から）



浦志岸の上井戸全景（南から）

序

本書は令和5年度に糸島市浦志における共同住宅建設に伴い実施した、浦志岸の上遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡が所在する浦志地域は弥生時代の小銅鐸などが発見され、周辺でも様々な時代の遺構や遺物が出土しています。本遺跡では中世～近代にかけての遺物が出土しました。

本書は、このような成果をまとめ、皆様に公開するものです。当地の歴史を解明する上での一助になれば幸いです。


なお、末筆となりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々ならびに報告書作成にあたって、ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

令和7年3月31日

糸島市長

月形 祐二

例言

1. 本書は宅地造成に伴い、令和5年度に糸島市が行なった浦志岸の上遺跡の発掘調査の記録である。
2. 浦志岸の上遺跡は糸島市浦志に所在し、約280㎡にわたって遺構や遺物を確認、発掘調査を行なった。
3. 遺構の実測にあたっては秋田雄也、栗野翔太、永島さくらが行なった。
4. 遺構の写真は空中写真を(有)空中写真企画に委託し、その他は秋田、栗野、永島が行った。
5. 遺物の復元は、内山久世、田尻裕泰、田中阿早緑、山口仁美、中村由美子、山崎嵩雄が行った。また、遺構、遺物のトレースは藤野さゆり、内山が行った。
6. 遺物の実測は、田尻、田中、山崎が行い、写真撮影は秋田が行った。
7. 本書に掲載する全体図及び遺構図で使用した座標は世界測地系平面座標第Ⅱ系に準拠した。また、図中に使用する方位は国土座標の座標北で、真北から0.19度西偏している。
8. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下の通り
 スス
9. 本調査に伴う出土資料及び記録類は糸島市に収蔵保管し、利用に供する予定である。
10. 本書の執筆及び編集は、秋田が行った。

本文目次

第1章	はじめに	
I.	調査に至る経緯	1
II.	調査の組織	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の記録	6
I.	調査の概要	6
II.	遺構と遺物	6
(1)	井戸	6
(2)	溝	9
(3)	土坑	9
(4)	その他の遺構	10
第4章	まとめ	18

挿図目次

図1	糸島市の所在地	2	図8	浦志岸の上遺跡 井戸出土遺物実測図 (1/ 3、●は1/ 4)	9
図2	糸島市主要遺跡分布図(1/50,000)	3	図9	浦志岸の上遺跡 溝平面断面図・土層断面図 (1/60)	11
図3	浦志岸の上遺跡と周辺の遺跡 (1/7,500)	4	図10	浦志岸の上遺跡 調査区北壁土層断面図及び土坑平面図・土層断面図 (1/60)	12
図4	浦志岸の上遺跡 調査区の位置 (1/1,200)	4	図11	浦志岸の上遺跡 溝及び土坑出土遺物実測図 (1/ 3、●は1/ 4)	13
図5	浦志岸の上遺跡 調査区全体図 (1/100)	5	図12	浦志岸の上遺跡 ピット出土遺物実測図 (1/3)	14
図6	浦志岸の上遺跡 調査区南壁土層図 (1/60)	7	図13	浦志岸の上遺跡 攪乱出土遺物実測図 (1/ 3、●は1/ 4)	17
図7	浦志岸の上遺跡 井戸平面断面図・土層断面図 (1/60)	8			

図版目次

巻頭図版1	浦志岸の上遺跡全景 (北東から)	図版4-1	浦志岸の上遺跡溝全景 (北から)
巻頭図版2	浦志岸の上遺跡井戸全景 (南から)	図版4-2	浦志岸の上遺跡溝土層断面 (南から)
図版1-1	浦志岸の上遺跡全景 (北東から)	図版 5	浦志岸の上遺跡 井戸、溝出土遺物
図版1-2	浦志岸の上遺跡北壁土層 (南西から)	図版 6	浦志岸の上遺跡 溝、土坑出土遺物
図版2-1	浦志岸の上遺跡井戸全景 (南から)	図版 7	浦志岸の上遺跡 土坑出土遺物
図版2-2	浦志岸の上遺跡井戸北側土層 (南から)	図版 8	浦志岸の上遺跡 土坑、ピット出土遺物
図版3-1	浦志岸の上遺跡土坑全景 (北から)	図版 9	浦志岸の上遺跡 ピット出土遺物
図版3-2	浦志岸の上遺跡土坑土層断面 (北から)	図版10	浦志岸の上遺跡 ピット、攪乱出土遺物

第1章 はじめに

I.調査に至る経緯

令和5年2月13日付で、上村建設株式会社 西支店から糸島市浦志2丁目318-1,326,325の一部の共同住宅建設工事280㎡に関して、埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第93条第1項）が、糸島市地域振興部文化課に対して提出された。

対象地周辺は弥生時代の小銅鐸等が確認された浦志遺跡A地点に近く、事業対象区の試掘調査が必要な旨を回答した。試掘調査は地権者承諾を元に行い、その結果、ピットが存在し、遺構や遺物が分布することから、遺跡が破壊される場合、発掘調査が必要であることが明らかとなった。

文化課は、試掘調査結果に基づき、開発側と協議を行い、共同住宅建設箇所の発掘調査を実施することで合意し、発掘調査対象面積は280㎡となった。発掘調査は令和5年7月4日に着手し、令和5年10月19日に終了した。

II.調査の組織

発掘調査および報告書作成に係る組織は以下のとおりである。

調査主体者 糸島市

調査地点 浦志岸の上遺跡（糸島市浦志2丁目318-1,326,325の一部）

調査年度 令和5年度

総括 地域振興部長 波多江修士

文化課長 村上 敦

文化課長補佐兼文化財係長 河合 修

事前審査 同 文化財係 主幹 瓜生 秀文

調査担当 同 文化財係 主任 秋田 雄也

同 文化財係 主事 栗野 翔太

同 文化財係 主事 永島 さくら

報告書作成 令和6年度

総括 地域振興部長 波多江修士

文化課長 村上 敦

文化課長補佐兼文化財係長 河合 修

報告書担当 同 文化財係 主任 秋田 雄也

第2章 位置と環境

糸島市は福岡県の西端に位置し、西は唐津市、南は佐賀市と境を接する。

浦志岸の上遺跡は糸島平野のほぼ中央に位置しており、東には雷山川が流れ、加布里湾に流れ込む。浦志地区の東に潤、志登地区とあるが、江戸時代に干拓を行う前までは古加布里湾が入り込んでおり、これらの地区は旧海岸線に沿った立地となっている。

周辺における調査例としては、浦志遺跡 A 地点が挙げられる。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝を確認しており、小銅鐸が舌と共に出土している。浦志本村遺跡では中世の溝を検出している。

浦志以外の地区に目を向けると、東隣の潤地区では潤古屋敷、潤番田遺跡、潤丸田遺跡で弥生時代～古墳時代、中世、近世の遺構遺物が確認されている。特に潤古屋敷遺跡や潤番田遺跡では中世の大溝を確認しており、居館の堀と考えられる。潤番田遺跡 2 次調査では中世～近世にかけての井戸が多く確認され、近世では独楽や包丁、キセルなど当時の人々の日常生活が窺える遺物が出土している。潤丸田遺跡では中世の道路状遺構も確認されており、潤地区では高麗青磁や陶枕などの貿易陶磁器も出土していることから中世には交易を通じて繁栄したことが伺える。志登地区では志登遺跡群としてこれまで 5 次にわたる調査が行われており、弥生時代から中世の集落は現在の集落の外側に居住域を形成することがわかっている。この



図1 糸島市の所在地

ように浦志や潤、志登地区では弥生時代から中世、近世の遺構、遺物が出土しており、各時代に渡って継続的に人々が生活を営んでいたことがわかる。

<参考文献>

平尾和久編 2011『潤遺跡群Ⅰ』糸島市文化財調査報告書第4集 糸島市教育委員会

瓜生秀文・平尾和久編 2012『潤遺跡群Ⅱ』糸島市文化財調査報告書第6集 糸島市教育委員会

瓜生秀文編 2013『潤遺跡群Ⅲ』糸島市文化財調査報告書第11集 糸島市教育委員会

平尾和久編 2020『潤番田遺跡』糸島市文化財調査報告書第22集 糸島市教育委員会

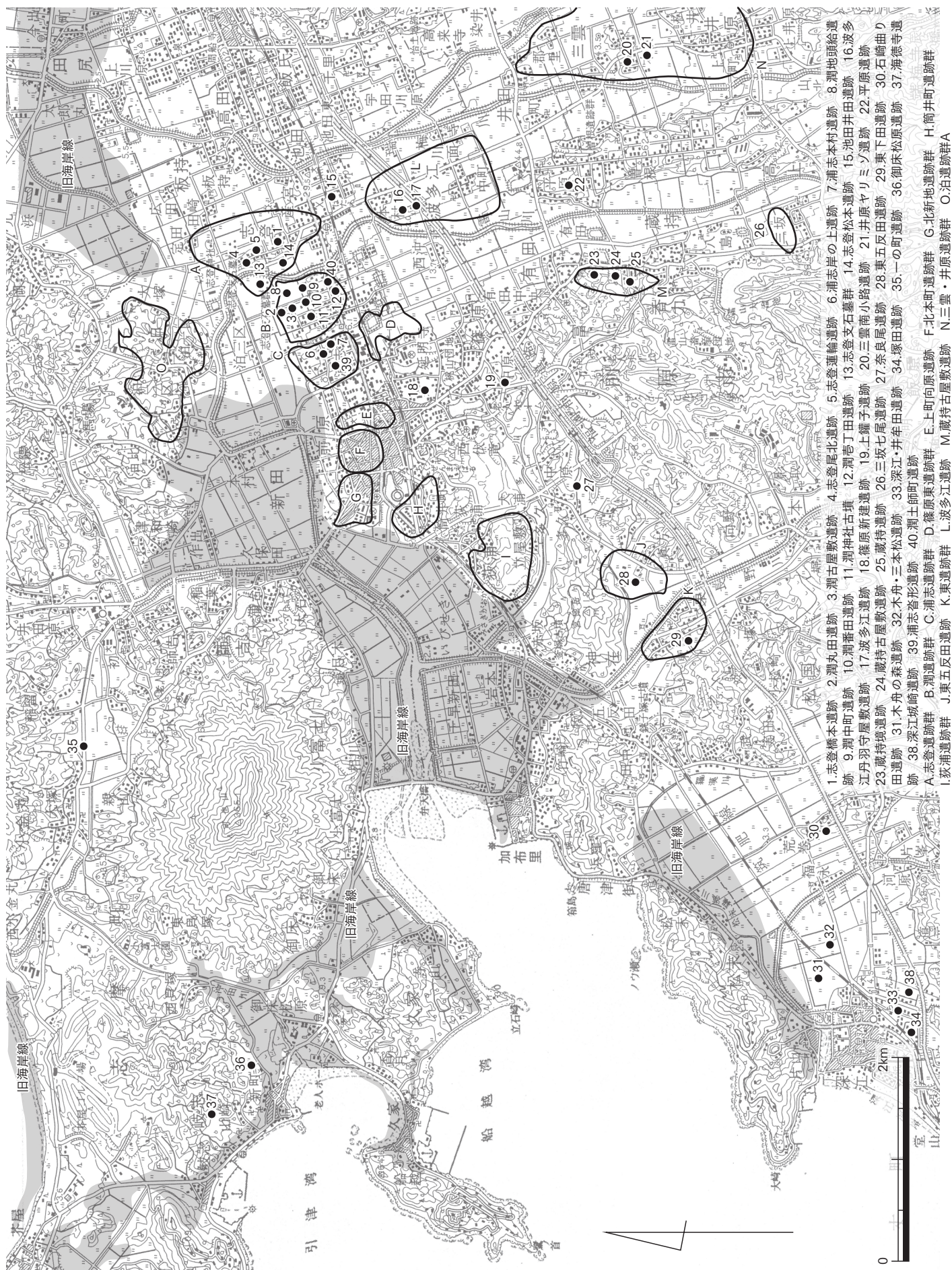


図2 糸島市主要遺跡分布図(1/50,000)



図3 浦志岸の上遺跡と周辺の遺跡(1/7,500)



図4 浦志岸の上遺跡 調査区の位置(1/1,200)

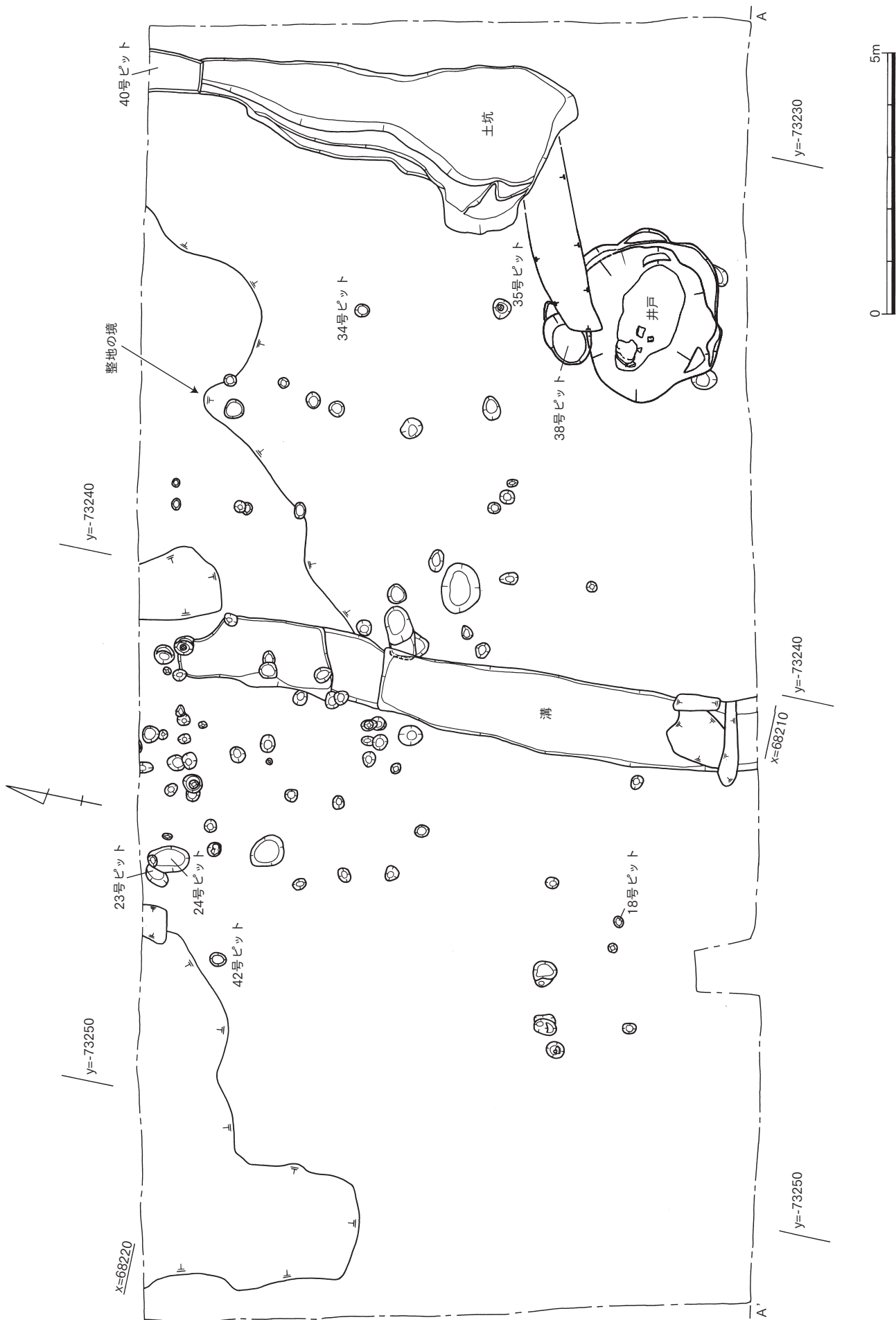


図5 浦志岸の上遺跡 調査区全体図(1/100)

第3章 調査の記録

I.調査の概要

浦志岸の上遺跡では近世の井戸、近世～近代の溝や土坑が検出され、主に陶磁器が出土している。地形は全体として東側に下がる。この土地は畑として利用されており、東側では地形が下がるため、地形が平坦になるように整地が行われている。また、耕作や植樹による攪乱が多く確認されている。近隣の浦志遺跡A地点では小銅鐸、浦志沓形遺跡では楽浪系や山陰系を中心とした外来系土器が出土していることから、弥生時代を中心とした遺構、遺物が期待されていた。

(1) 調査区南壁の基本層序 (図6)

表土(第1層)、耕作土(第2・3層)の下には地山面があり遺構面となっている。攪乱も多く、大きく削平を受けていると考えられる。本遺跡の地山は黄褐色土で、白色のaso-4が所々入る。黄褐色の地山の下は青灰色粘土層で、削平の激しいところはこの粘土層が地山として現れる。調査区中央の溝より東側はこの上に整地層(第16～18・20・22層)を施す。整地層からは近世陶磁器の小片が若干確認できるため、詳細な時期は定かではないが、近世期に整地を行ったのではないかと推測できる。

(2) 調査区北壁の基本層序 (図10)

調査区北壁は40号ピットと整地の様子がわかる箇所のみ土層図として実測した。第1層は表土で、第2層は耕作土である。第5層は整地層で地山が東に向かって下がっていくところを盛り土していることがわかる。第3層は40号ピットで第4層の攪乱を切っている。

II.遺構と遺物

(1) 井戸 (図7)

井戸は調査区南東側で確認した。径は2.5～3.0mで深さは約2.1mまで確認している。底が非常に不安定で、壁が崩落する危険性もあったため、安全性を考慮して途中で掘削を断念した。井戸枠は確認できなかったが、B-B'の土層断面から掘り直されていることがわかり、この際に抜かれた可能性がある。下層から15～16世紀ごろの鍋が出土しているが、井戸そのものは整地層の上から切り込むため、近世に掘削されたと考えられる。中世の遺物は井戸掘削時の混入であろう。

出土遺物 (図8)

1～4は北壁第4層から出土した。1は陶器の碗で銅緑釉がかかる。胎土は灰色がかり、精緻。細かな貫入が全体に見られる。内面には粗い砂が付着している。肥前や瀬戸、美濃のような産地ではなく、在地系の窯と思われる。2は瓦質火鉢の口縁部。外面にヨコナデを行った後、葉のようなスタンプ文が施される。内面の口縁内湾部は一部が剥がれる。葉のようなスタンプ文は珍しく、近隣で類例は確認できていない。16世紀ごろか。3は弥生土器で混入と考えられる。4は瓦質鍋で、井戸の下層から出土。外面全体に煤が付着し、

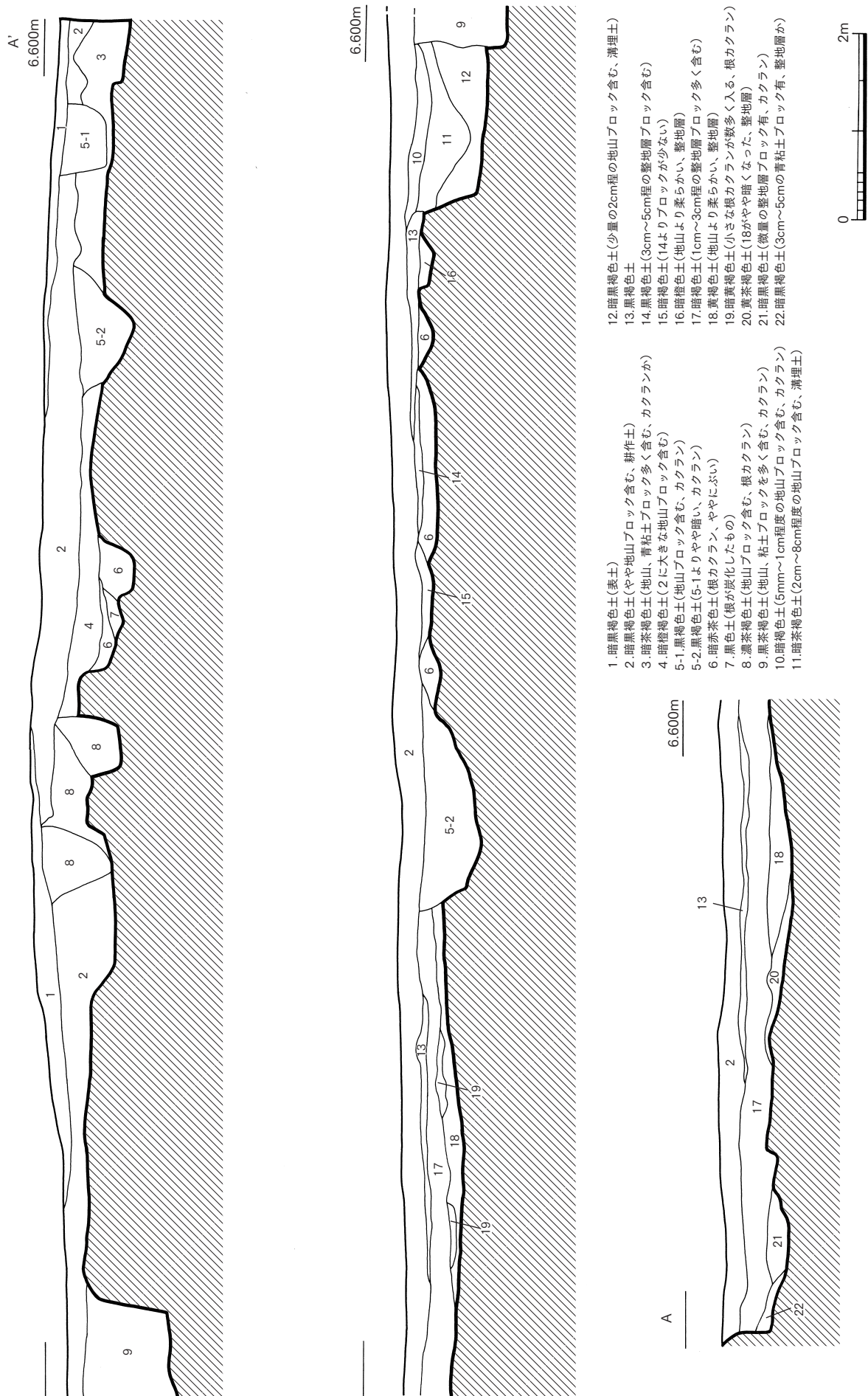


図6 浦志岸の上遺跡 調査区南壁土層図(1/60)

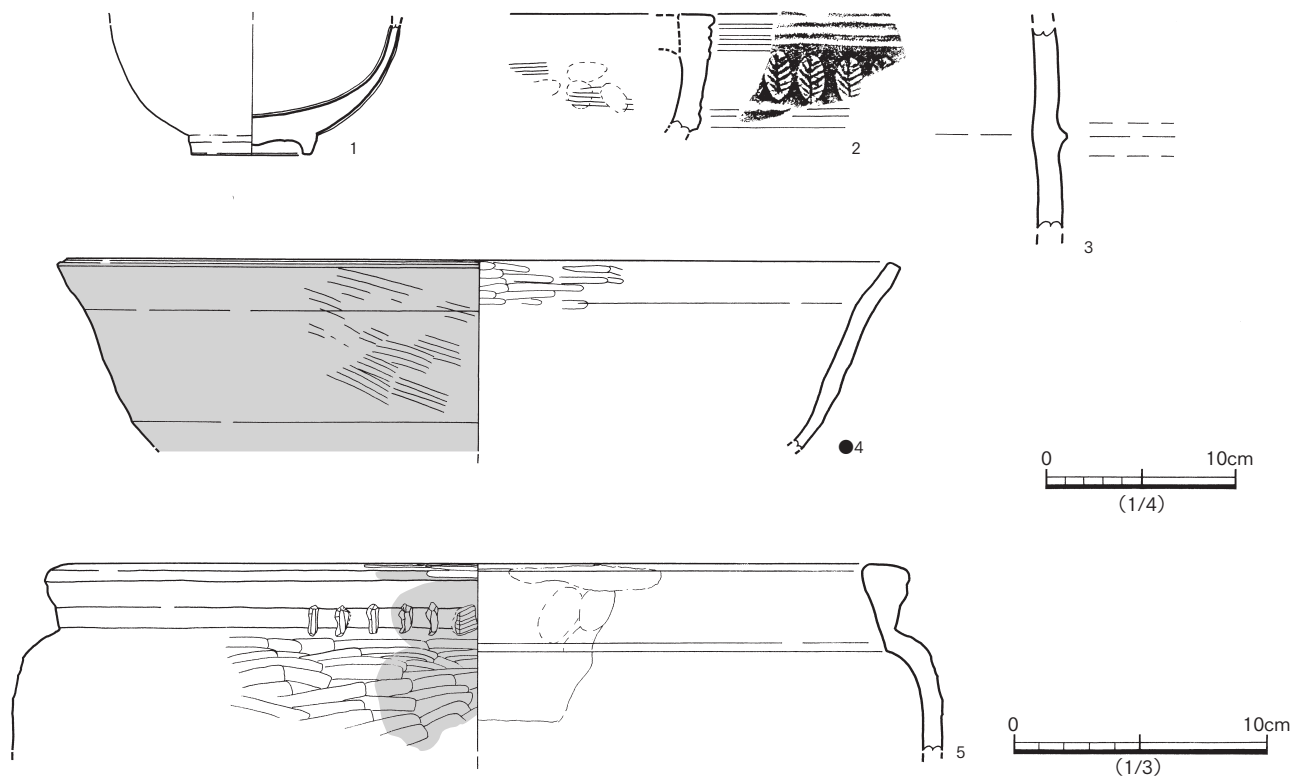


図8 浦志岸の上遺跡 井戸出土遺物実測図(1/3、●は1/4)

脆い。内面には横方向のミガキが残り、外面はヨコナデとその後ハケメを施す。復元口径43.3cmとやや大型。15世紀～16世紀のものと考えられる。5は瓦質の風炉か。外面に煤が付着しており、一部調整が不明瞭。井戸北側壁の5層から出土。外面には刻み目が一部にのみ施され、全周はしない。口縁部と肩部にミガキを施す。内面は指頭痕が残る。

(2) 溝 (図9)

調査区中央で検出され、長さ7.3m以上、幅1.5m、深さ0.3mを測る。南側は耕作に伴う攪乱で切られている。溝から出土した遺物は近世後半～近代。この溝より東側で整地が行われている。

出土遺物 (図11)

1～8が溝内から出土した遺物である。肥前系の磁器が多い。1は染付の皿の底部片。内面には花が描かれる。2は筒形碗の口縁部。復元口径7.7cmで、外面には花卉文、内面には帯状に文様を巡らす。18世紀後半～19世紀前半。3は瓶の底部と考えられる。飴釉がかかり、復元底径7.5cm。近代のものと考えられる。4は瓶の口縁部。復元口径3.3cmで、透明釉が施される。近世末から近代のものか。5も瓶の口縁部で透明釉が施される。6は白磁碗の胴部でやや濁った透明釉を施す。7は甕の口縁部、弥生時代後期のもので、混入と考えられる。8は須恵器で混入したものと考えられる。内外面にタタキが施される。通常内面は同心円の当て具痕が多いが、平行タタキが施される。

(3) 土坑 (図10)

土坑は調査区東端で確認した。当初、溝として検出していたが、南側で切れることや土

層でも確認できるように複数回にわたってピット状に掘削されていることから土坑とした。当初は溝として認識していたことやピット状の掘削時の色が近似していることから、複数回ピット状に掘削した土坑という認識が出来ず、溝状に掘ってしまった。これは担当者の手不潔によるものである。

土坑からは近世後半～近代にかけての陶磁器を中心とした遺物が多く出土した。おそらくピット状に掘られたものは廃棄遺構であったと考えられる。後述の40号ピットも同様の性格と考えられる。

出土遺物（図11）

9は広東碗で外面に唐草文、内面口縁部に二重圏線、見込みの周りに圏線、見込みにも文様が描かれる。見込みの文様は非常に略化されており不明である。胎土は精緻だが、ややくすんだ灰白色。18世紀後半～19世紀前半。10も広東碗で、9より器壁が薄い。外面は唐草文、内面には圏線が一条描かれる。時期は9と同様18世紀後半～19世紀前半。11は染付皿で外面は簡略化された如意頭唐草文と圏線が描かれ、内面は花卉が描かれる。12は波佐見焼のくらわんか碗で、底部がやや厚い。外面は唐草文。胎土はややくすんだ灰白色。18世紀後半。13は広東碗の底部。高台には二重圏線が巡る。内面は草花文か。14は端反碗の口縁部で外面に圏線を巡らせている。圏線は複数回に分けて描いている。19世紀前半から中頃。15も広東碗の口縁部で、口縁内面は二重圏線、外面にも文様を描くが、残存部が少ないため詳細不明。他の染付と比較すると呉須の青みが強い。19世紀前半ごろか。16も広東碗の口縁部から胴部。外面に草文を描く。17は広東碗もしくは端反碗の胴部。呉須の青みが濃く、15に近い。内外面は草花文を描く。18は紅皿で、焼成時の収縮により釉薬に皸がよる。やや厚めの施釉。19は白磁碗の胴部。外面は透明釉で内面は施釉なし。胎土は精緻でやや白灰色を帯びる。20は皿の底部か。内外面青緑釉で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎをする。17世紀後半から18世紀前半ごろに流通したタイプか。21は仏飯具の脚部か。胎土は灰色、緑釉で底は無釉であり、形は仏飯具と似ているため、仏飯具としたが、径の大きさや釉薬、仕上げの違いから他の器種の可能性もある。22は染付仏飯具で、外面に円文や圏線が巡る。底部は一部施釉がされていない箇所があり、素地が見える。18世紀後半ごろか。23は19世紀ごろの瓶で、口縁部から頸部にかけて残存している。胴部との境で釉が異なり、施釉方法に違いがみられる。また頸部内に絞りが見られ、胴部との接着方法もわかる。24は瓶の胴部で、23とは別個体であるが、同型式のものと考えられる。内面下部には施釉されるものの、外面下部には施釉がない。25は陶器の甕の底部。鉄釉が施される。26は土瓶の胴部で、屈曲部直下と考えられる。内外面には鉄釉が施される。27・28は土器である。27は火鉢の底部で外面は摩滅している。内面に指頭痕など調整痕が残る。28は素焼きの甕の底部で、作りの荒さから便槽として用いた可能性がある。胎土は精緻であるが指頭痕が多く残る。

(4) その他の遺構

そのほかの遺構としてピットと攪乱が挙げられる。ピットは多く検出されているが、そ

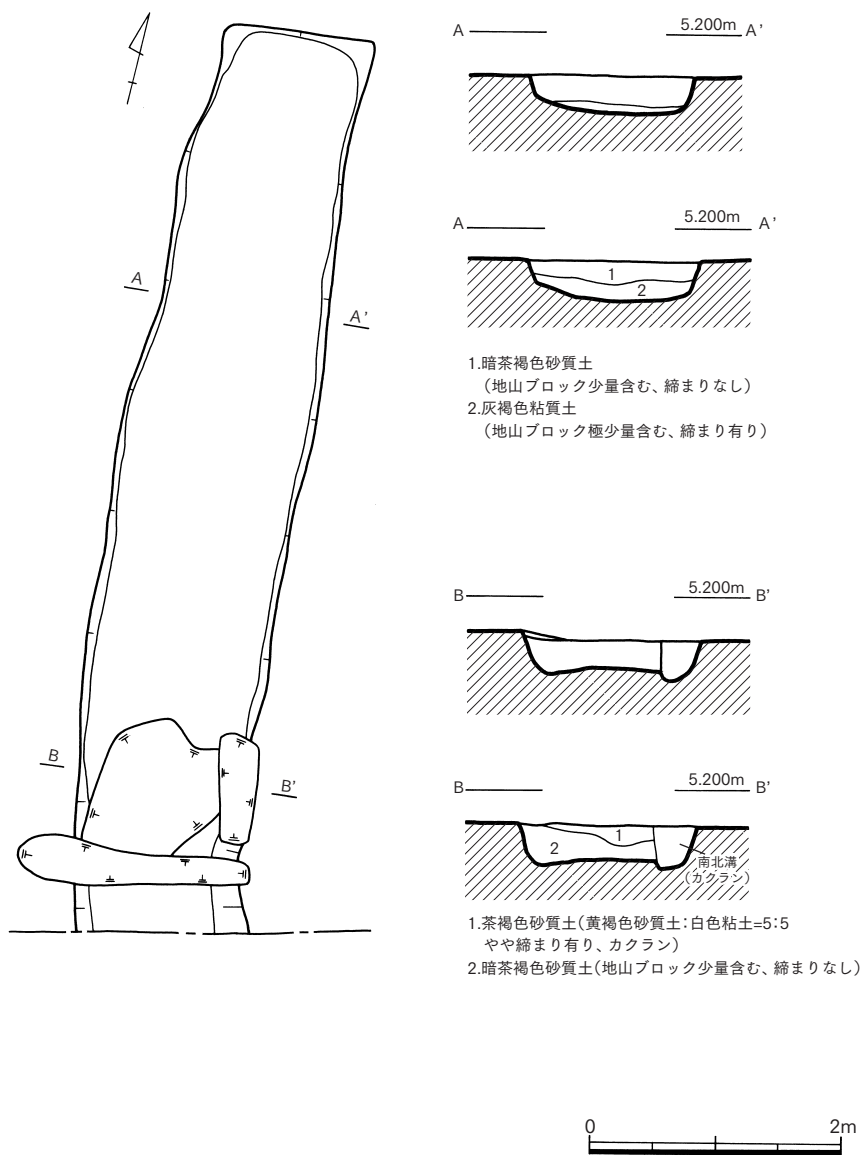


図9 浦志岸の上遺跡 溝平面断面図・土層断面図(1/60)

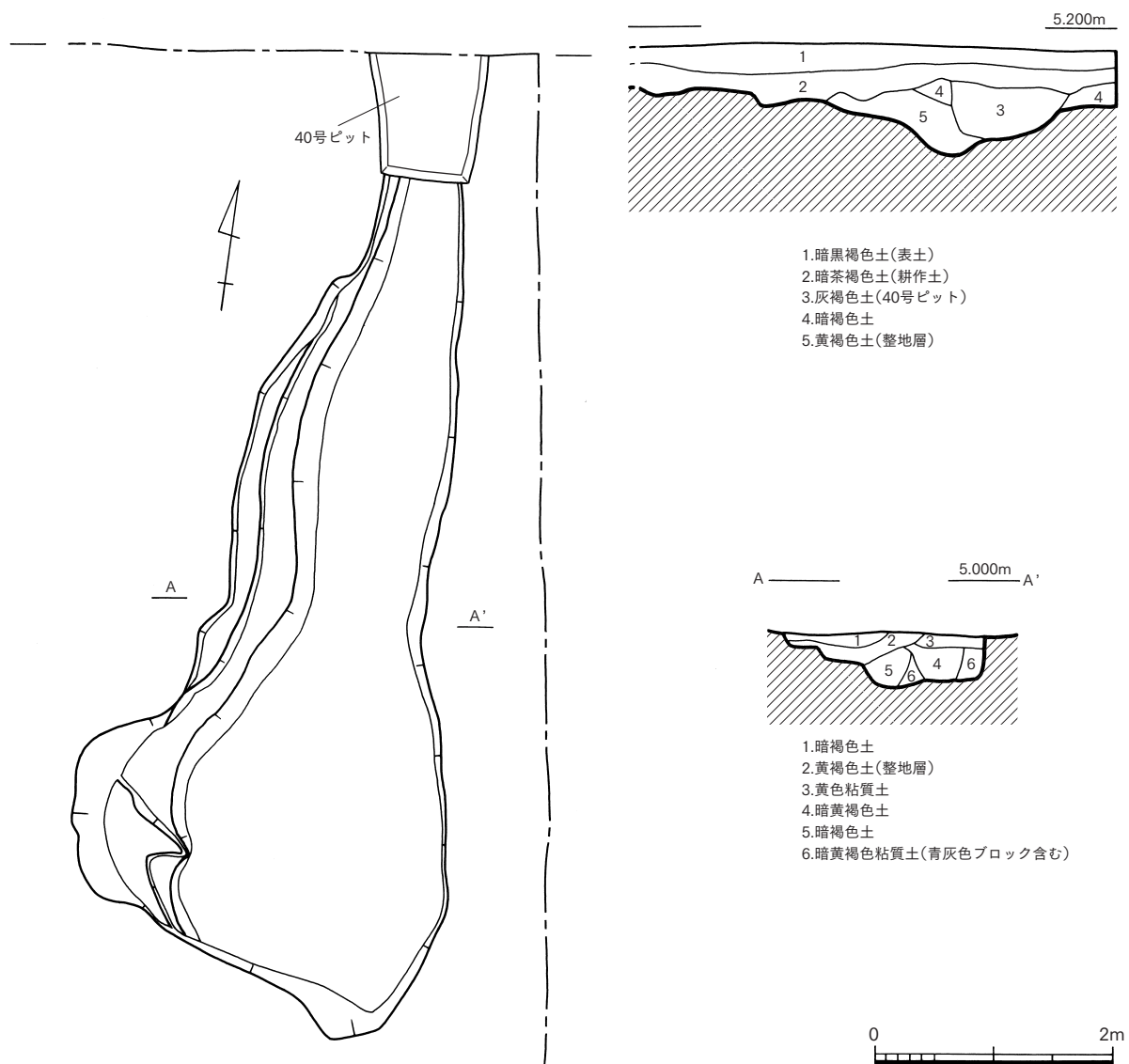
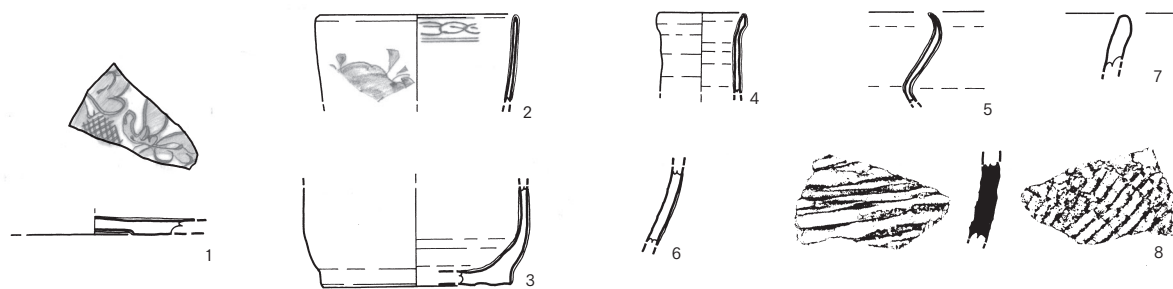


図10 浦志岸の上遺跡 調査区北壁土層断面図及び土坑平面図・土層断面図(1/60)

溝



土坑

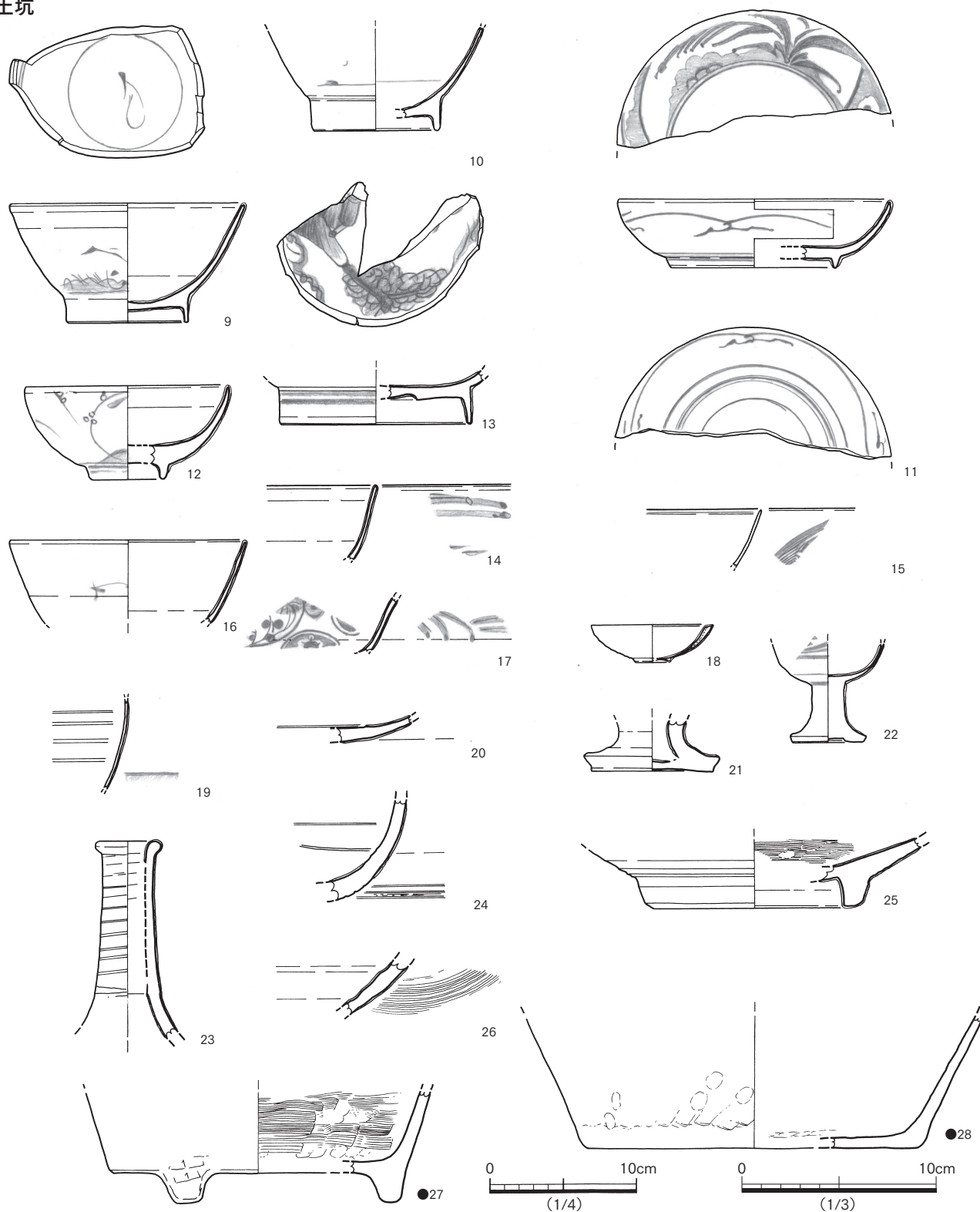


図11 浦志岸の上遺跡 溝及び土坑出土遺物実測図(1/3、●は1/4)

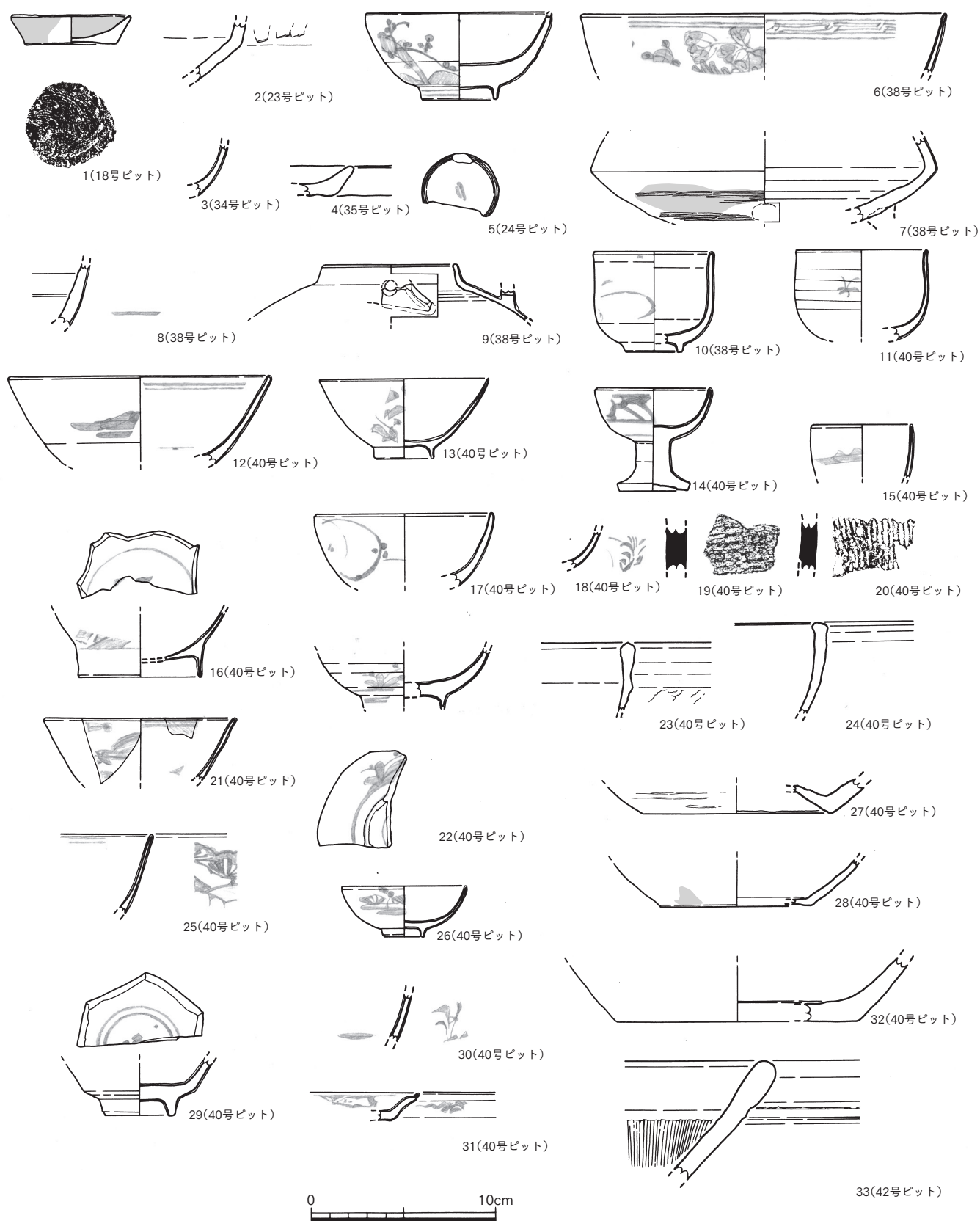


図12 浦志岸の上遺跡 ピット出土遺物実測図(1/3)

の多くは直径15cm程度の非常に小形のものです、土質からも近世以降のものと考えられる。なお、40号ピットは、掘方から土坑と同様の性格と考えられる。

ピット出土遺物（図12）

1は土師器皿で、18号ピットより出土。底部は糸切りで、口径6.3cm。内外面はナデており、ススを確認できる。灯明皿として用いたと考えられる。2は23号ピットから出土した焙烙の胴部。内面は指押さえの後にナデている。外面の屈曲部周辺には工具の当て具痕が確認できる。3は34号ピット出土の陶器碗胴部で透明釉がかかる。素地はやや黄色がかかった白色で全面に貫入が見られる。4は35号ピット出土の土師器皿で、内面にナデがみられる。5は24号ピット出土のくらわんか碗で、高台外部に2条の線が描かれる。外面は梅の木を描く。18世紀中頃～後半か。6～10は38号ピット出土。6は広東碗の口縁部。内面には口縁部に雷文、外面には草花文と圏線を描く。7は土瓶で外面に煤が付着する。内面には灰釉が施される。8は瓶の胴部か。内面は施釉せず、外面は染付で一条の圏線が描かれる。釉薬の様子から近代以降のものと考えられる。9は壺の口縁部から頸部に薄く緑釉がかかる。耳が貼り付けられているが、残存率が6分の1程度のため、元はいくつ貼り付けられていたか不明である。素地は精緻で貫入が多く入る。10は染付の湯呑み。通常の染付磁器と比べると、色がやや黄色を帯び、呉須も黒に近い藍色である。焼成があまいことが原因と考えられる。11～32は40号ピットからの出土遺物である。11は小碗で10と同様に焼成が良好ではない。外面は昆虫文を描く。12は広東碗で、内面には圏線が描かれる。13はやや小型の碗で、外面は唐草文。薄手で素地は精緻な白色を呈する。14は染付の仏飯具。19世紀ごろか。山水を外面に描く。15は染付の小碗で、外面に山を描く。16は広東碗の底部。内面に圏線、見込にも花文を描く。18世紀後半から19世紀前半。17はくらわんか碗で唐草文を外面に描く。18世紀後半。18は10や11のような焼成のあまい小碗で、外面に草文を描く。19は須恵器であるが、小片のため詳細不明。20は須恵器で、溝出土のものと胎土やタタキから同一型式と考えられる。21は端反碗で、外面の文様は不明、内面は口縁部に圏線を描く。19世紀前半。22はくらわんか碗の底部で内外面に草花文を描く。18世紀後半。23・24は焙烙の口縁部。23は胎土は精緻で雲母が多い。24と類似した胎土である。24は外面は摩滅しており調整が不明瞭。23・24ともに18世紀後半から19世紀中頃か。25は端反碗の口縁部で、外面には草花文を描く。19世紀前半。26は小形の碗で外面に草花文を描く。27は土瓶の底部で内部に指による回転ナデ調整が残る。28は土瓶の底部で内面に釉がかかり、外面は無釉である。29は染付青磁碗で見込みに五弁花のコンニャク印判を押す。18世紀前半～中頃。30は染付碗の胴部片で外面に草文が描かれる。31は染付皿で外面は雲文、内面は縁に草花文を描きその下に山水文を描く。32は陶器甕の底部。33は42号ピット出土のすり鉢で、19世紀後半以降、近代のものと考えられる。

攪乱出土および表採遺物（図13）

1は弥生土器の甕の胴部。2は土師器皿で内面はナデ。3は須恵器坏の底部。4・5・7～9は龍泉窯系青磁碗。4は青磁碗口縁部。ややくすんだ色調で外面に簡略化された雷文帯が

みられる。上田編年C—2類で14世紀後半。5の胴部は内部に花文を施す。大宰府編年Ⅰ—2類で12世紀後半。6は黄灰色がかった白磁の玉縁の口縁部で12世紀後半か。7は底部で高台は釉を剥ぐ。大宰府編年碗Ⅰ類で12世紀後半。8は胴部で時期は不明。9は表採資料で大宰府編年Ⅰ—2類。10は染付碗の口縁部で、幾何学文様を描く。11は青磁瓶の口縁部で、時期は近代か。12は染付皿で内面は型紙刷りで全面に施釉する。時期は19世紀。13、14は博多七輪と呼ばれるもので、素焼きの七輪。両方とも使用に伴う煤などが付着しておらず、何らかの理由で使われることがなかったのだろう。13は内面に突帯を持ち、下部に窓を持つ。14はアーチ形の脚部で、上部に窓がある。両者は同一個体ではないが、胎土や作りは類似している。博多七輪は18世紀～19世紀ごろ、博多の旧瓦町で生産された博多素焼きと呼ばれる製品のひとつ。博多遺跡群などでは、19世紀ごろのもので、文字が刻まれたものや「長右エ門」などスタンプが押されたものなど様々な七輪が出土している。北九州の木屋瀬宿本陣跡や柳川市の矢加部町屋敷遺跡などでは「勸業課卸□」、「筑前博多産□」、「更荘」などというスタンプが見られる七輪が出土している。北九州や柳川の例は19世紀～20世紀のものである。本遺跡出土の七輪も他の遺跡同様19世紀頃のものであろう。博多とのつながりを示す遺物である。15・16は広東碗。15は見込みに山水、外面には家屋や網干を描く。18世紀後半～19世紀中頃。16は内面に昆虫文を描き、外面に木を描く。15と作りが類似しており、同様の時期と考えられる。17は小碗の底部で、外面に草文を描いている。18は陶器の皿で、灰釉を施す。内面は蛇の目に釉を剥いで、剥いだ箇所を錆釉を塗る。18世紀中～後半。19は広東碗の胴部か。内面には施釉せず、外側に透明釉を施す。外面中央部に一条線を引く。時期は不明。20は染付碗で、17と比べると高台が低い。見込みに昆虫文を描き、外面は花卉文か。21は青磁の深鉢で、口縁部は強く外反する。22は染付碗の口縁部で、内面は四方禪文と笹文、外面は唐草文が描かれる。18世紀後半～19世紀。23は仏飯具であるが、脚部がやや太く、坏部の屈曲が角張っており、近代のものと考えられる。24は溝縁皿で、外面と内面に灰釉がかかる。内面見込みは釉を剥ぎ、口縁部には砂目が一部残る。時期は17世紀前半。25は染付の猪口か。型紙刷りで藍が濃く青みが強い。19世紀。26は染付瓶の胴部から底部。外面には花卉を描く。内面には施釉しない。回転ナデの痕跡が明瞭に残る。形状は貧乏徳利に近い。



図13-13 博多七輪胴部



図13-14 博多七輪底部

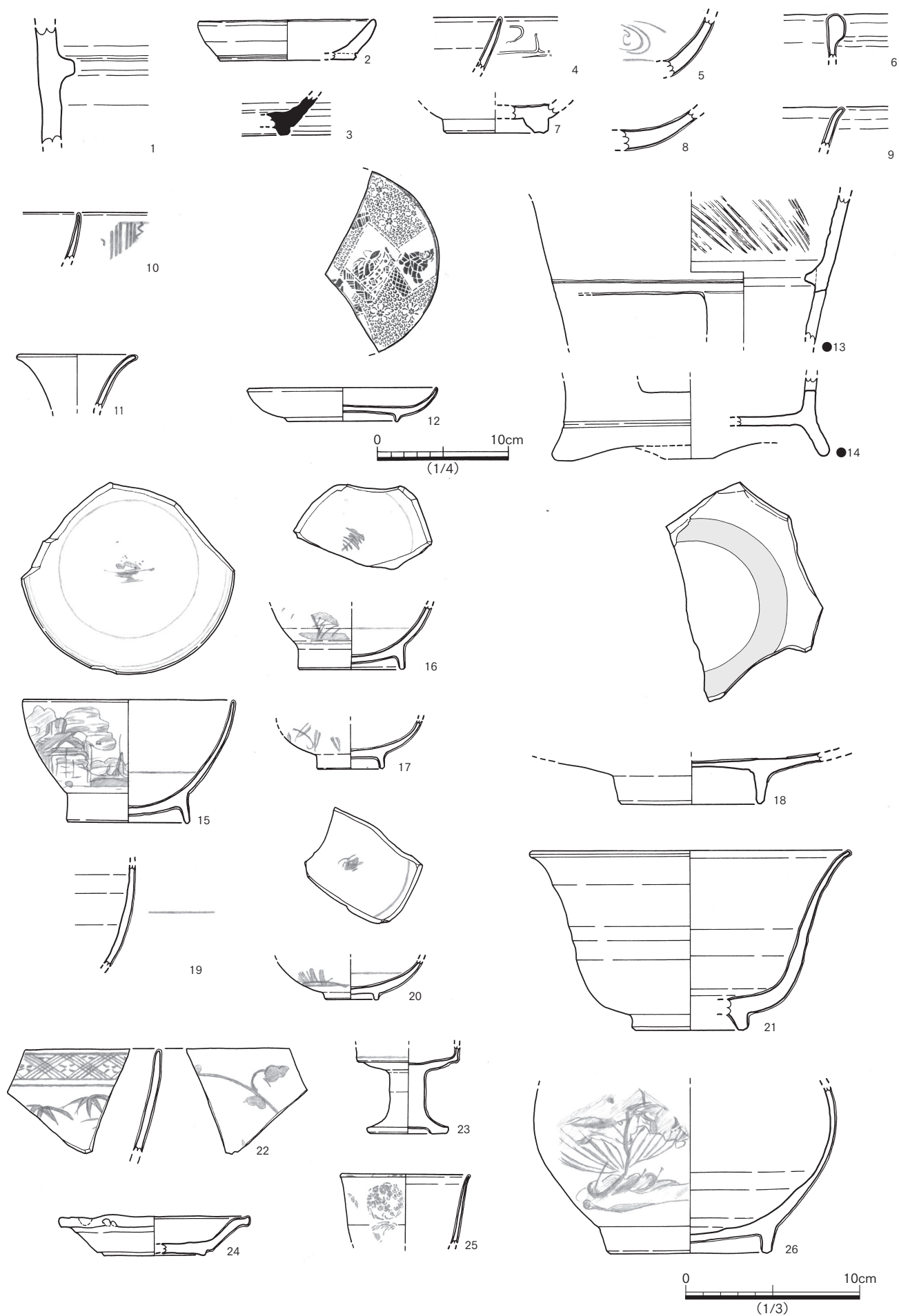


図13 浦志岸の上遺跡 攪乱出土遺物実測図(1/3、●は1/4)

第4章 まとめ

近隣の浦志遺跡A地点などでは弥生時代の遺構、遺物は確認されているが、本遺跡では削平により、弥生時代の遺物は若干の土器片が混入する以外に確認できていない。本遺跡も丘陵地であるため、本来は遺構が存在した可能性が高い。

今回の調査では主に近世～近代にかけての遺構、中世～近代の遺物を検出した。近世、近代において、遺物廃棄土坑が検出されていることや、中世の遺物が出土していることから、中世から近代にかけて人々が近隣に居住していたと推測できる。出土した遺物は日常生活に関わる遺物がほとんどであったが、遺跡内では建物跡が確認できていない。なお、近世の遺物の中には焼成の良くない陶磁器が含まれており、一般的な陶磁器ともに日常的に使用していたことがわかる。攪乱からの出土ではあるが、博多七輪も出土しており、18～19世紀ごろには博多とつながりがあったことが確認できる資料である。

本調査地が集落内部と断言することはできないが、整地を行い、井戸を掘っていることから人々の生活に近い場として機能していたに違いない。発掘調査を行う前は畑として利用されており、大正時代の地図においても畑として利用されていた。整地も居住地としての整地ではなく耕作地として土地利用を行うために実施した可能性がある。溝についても、耕作地に関係する可能性が考えられる。

また、遺物廃棄土坑は地籍の境に沿って作られており、調査区東側に集落が位置した可能性が高い。本遺跡近接地は居住区域の可能性があるので、近隣で調査を行う際は注意が必要である。

参考文献

- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2日本貿易陶磁研究会
- 宇野慎敏編2000『北九州市埋蔵文化財調査報告書255：木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 秦 憲二編2007『矢加部町屋敷遺跡1』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第3集 福岡県教育委員会
- 松崎友理・加藤良彦・佐藤浩司編2023『博多192』博多遺跡群第213次調査埋蔵文化財調査報告書 1480集 福岡市教育委員会
- 宮崎亮一編2000『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会

図 版



図版1-1 浦志岸の上遺跡全景（北東から）



図版1-2 浦志岸の上遺跡北壁土層（南西から）

図版 2



図版2-1 浦志岸の上遺跡井戸全景（南から）



図版2-2 浦志岸の上遺跡井戸北側土層（南から）



図版3-1 浦志岸の上遺跡土坑全景（北から）

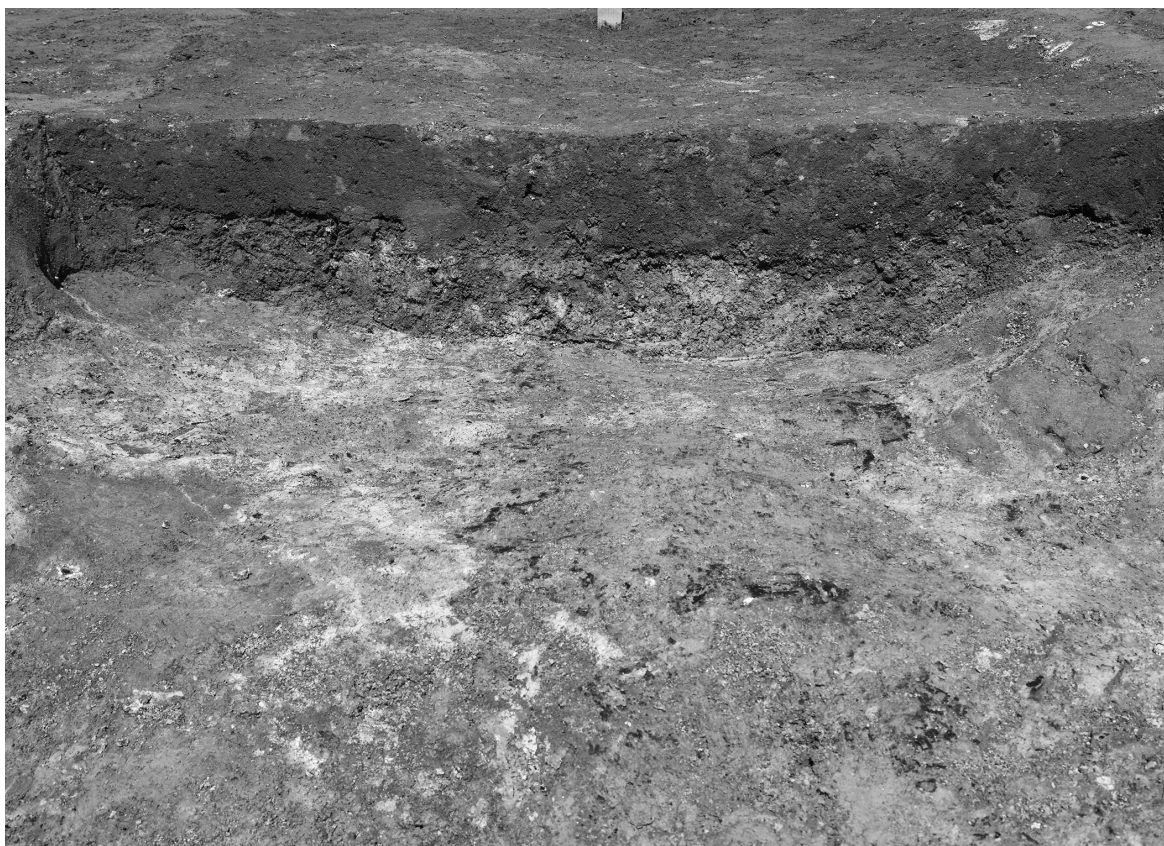


図版3-2 浦志岸の上遺跡土坑土層断面（北から）

図版 4



図版4-1 浦志岸の上遺跡溝全景（北から）

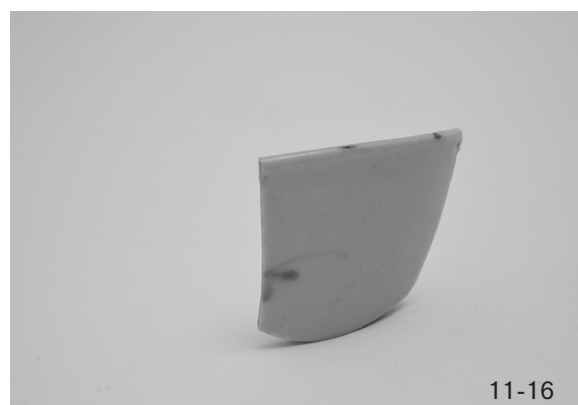
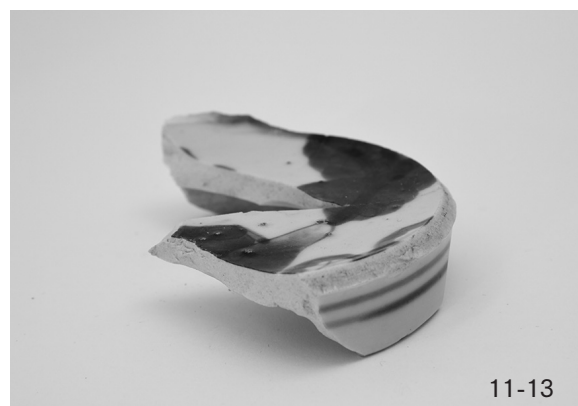


図版4-2 浦志岸の上遺跡溝土層断面（南から）



図版5 浦志岸の上遺跡 井戸、溝出土遺物

図版 6

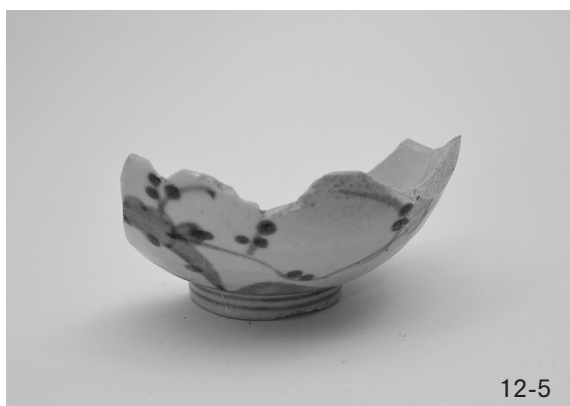
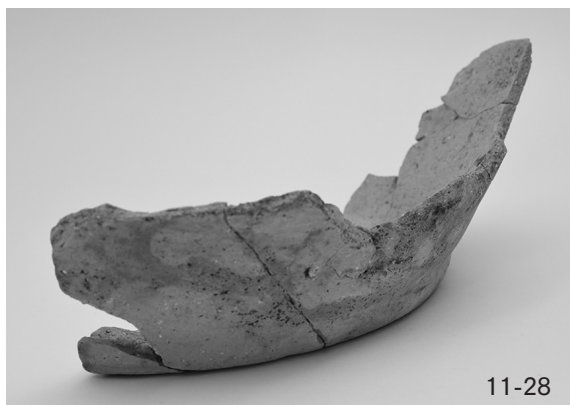
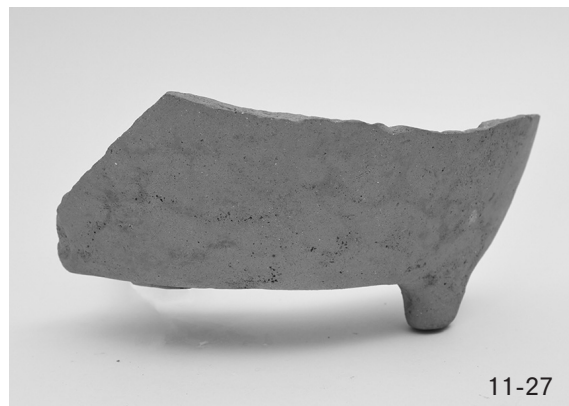


図版6 浦志岸の上遺跡 溝、土坑出土遺物

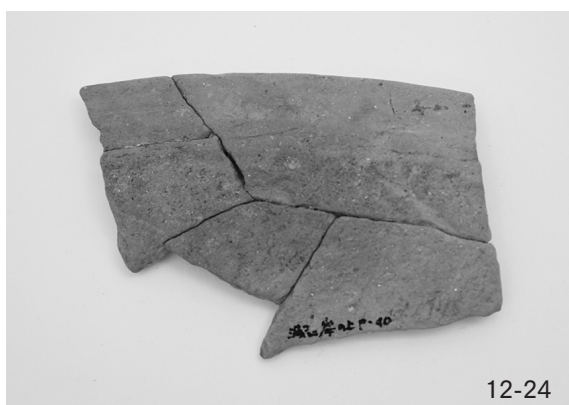
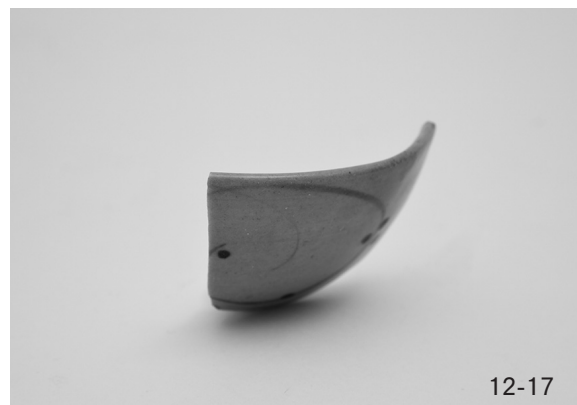


図版7 浦志岸の上遺跡 土坑出土遺物

図版 8

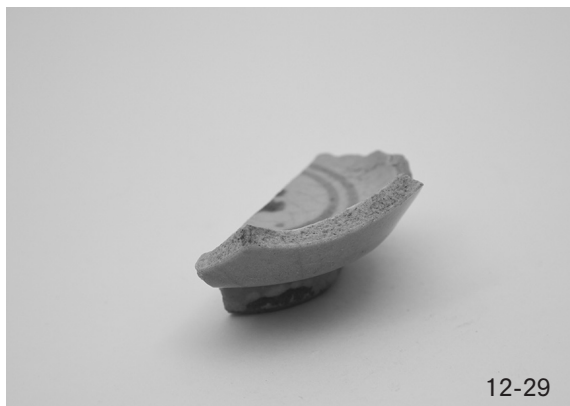


図版8 浦志岸の上遺跡 土坑、ピット出土遺物



図版9 浦志岸の上遺跡 ビット出土遺物

図版 10



図版10 浦志岸の上遺跡 ピット、攪乱出土遺物

報 告 書 抄 録

フリガナ	ウラシキシノウエイセキ							
書名	浦志岸の上遺跡							
副書名	共同住宅建設に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
著者名								
編集機関	糸島市							
所在地	〒819-1192 福岡県糸島市前原西一丁目1-1							
発行年月日	令和7年(2025)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浦志岸の上遺跡	福岡県 糸島市 浦志	40230		33° 33′ 50″	130° 12′ 40″	2023/7/4 ～ 2023/10/19	280㎡	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浦志岸の上遺跡	集落	中世、近世、 近代	井戸、溝、土坑		土師器、陶磁器			

浦志岸の上遺跡

—共同住宅建設に伴う調査—

糸島市文化財調査報告書 第36集

令和7年(2025)3月31日

発行 糸島市
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号
TEL 092-332-2093

印刷 (株)重富プラス
福岡県糸島市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661

